

平成17年9月20日

横浜市長 中田宏 殿

脳血管医療センターに於ける山口滋紀神経内科部長の
患者放置に対する処置の要望

「脳卒中から助かる会」
代表 上野 正
同 吉田 孝

「脳卒中から助かる会」会員で、脳血管医療センターに通院しておいでの方が、7月末に脳梗塞が再発し、診察を受けるためセンターに行ったが、その際当直の山口滋紀神経内科部長が一晩放置したため、病状が悪化してしまった。入院約1ヶ月半の後、9月初めに退院したが、後遺症が残り、マヒ、しびれ、痛みの為、歩行や食事その他日常生活全てに苦痛と不自由な毎日を送ることになりました。

患者の御家族は、山口医師の処置に疑問を持ち、センターに質問状を提出された。そのときに頂いた質問状の写しによれば、事態の概要は次の通りである。

7月26日、左手首から先にしびれを感じたので、午後2時頃センターに行き、MRI 検査を受けたが新しい梗塞は無いとの診断で帰宅。

7月27日、時間とともに症状が悪化し、左腕、左顔面、鼻、口の感覚が無くなったため、午後10時頃センターへ行き、当直の山口医師の診察を受けた。

症状を詳しく説明したが、山口医師は32時間前のMRI 検査結果をもとに「問題ない」とした。新たにMRI 検査を求めたが拒否され、様子を見るための入院を求めたがこれも拒否されて、やむなく帰宅した。今まで3年間何回かセンターで治療を受けたが、こんなひどい扱いを受けたのは初めてだったという。

7月28日、早朝に歩行不能、ろれつが回らなくなり、救急車で搬送された。センターでMRI 検査を受けた結果、梗塞が出ており、入院治療を受けた。

患者と家族に山口医師は、「昨夜家に帰ってから発症したのでしょうか。夕方飲んだ安定剤が悪かったのかも知れない」と説明。

退院後も左手足のしびれと痛みで歩行が困難、口がマヒのため、食事の時内頬を噛んでしまい腫れて痛くて食べるのも苦痛な状態である。

御家族は、「どう考えても27日には脳梗塞が発症していたとしか思えない。どうしてその時検査をしてくれなかったのか？」と納得がいかずに投書をしたそうです。

山口医師については、本年1月センターに就任以来このほかにも不適切な診療の事例があったと云われている。

今回とくに明白な被害が発生したため、今後の再発も危惧されるので、中田宏市長に対し、以下の4点を要請する。早急に実施の上、結果をご報告願いたい。

- 今回の事態を調査・確認し、責任を明らかにすること
- 山口医師に不適切な診療について患者と御家族に謝罪させること
- 同様の事態再発防止の対策をとること
- 過去に類似の事例が無かったかどうか調査すること

脳梗塞は、いつ発症するか分からず、短時間のうちに治療しなければ急速に悪化する。早急に治療するのが神経内科の役割で、脳卒中医療の常識という。患者さんが症状を訴えているのに何もせずに家に帰すなど信じがたい。

なお、山口滋紀医師は本年1月、センターに於ける外科医のルール違反による事故と管理部門の隠蔽工作にかかわる処分があった後、病院を立て直すとして消化器外科医である福島センター長とともに、神経内科部長としてセンターに送り込まれたという。実際は、4月1日の人事異動による松岡慈子神経内科副医長の配置換え（事故隠し目的の）の準備だったとも伝えられる。

今回の事態はこうした措置がセンターの医療水準を低下させ、患者を危険な状態に置く、極めて不適切なものであったことを示している。

追記：センターでは9月16日にセンター長と山口医師が患者と御家族に面会して釈明したが、本人と御家族は納得せず、書面による回答を求められた。

以上